

## MCR 日記

MCR13 期 予防医療学分野/救急初期診療医学分野 医学博士課程 岡田 遥平

早いもので、京都大学大学院に入学し MCR 受講生になって一年が経過しようとしている。後輩諸氏の参考になればと思い、この1年間を振り返る。

### 春

4月1日。教授より訓示をいただき、その後メンターと今後の研究について相談した。救急医であった私は、入学前から一応勉強し、いくつかの救急の研究テーマを温めていた。しかし、どのテーマも、「君の研究は京都大学の学位論文にふさわしくない」と言われるだろう、と一蹴された。愕然とした。壁は高かった。そう言えば、学位を取れぬままの学生も数多くいると聞く、これが京都大学なのか。4月1日にして研究テーマ探しの旅に出ることとなった。

そのうちに授業が始まった。アイサー (ICER)、クエリー (QALY) とか読み方もよくわからないお金の話もでてきた。MCR のハイライトであるプロマネ、そのリハーサルであるプレプロマネも始まった。Case Cross-Over デザインとか、ネットワークメタアナリシスなる、聞いたこともない研究手法がでてきた。コメントの MCR の OB からは、「この引用文献には、そうは書いてない。」と指摘されていた。専門分野でもないのに、予め引用文献をチェックしていたのだった。市中病院で日々の臨床というぬるま湯に浸かっていた私にとって、MCR のレベルの高さにドギマギした。

### 夏

少しだけ授業にも慣れてきた。ジョン・スノーが偉い先生だということもわかったし、どうやら「p 値は重要でない」らしいこともわかってきた。

MCR の学生は各診療科から幅広く参加していた。中国からの留学生もいた。各々の専門分野は異なっていて、研究内容を聞くだけでとても刺激になった。「野外活動が近視を抑制するか」を検証するクラスターランダム化臨床試験計画を議論することなど、もう二度とないだろうと思う。とてもよい勉強になった。毎日のように課題が出てグループで議論する日々となった。

恒例の夏休みの宿題もあった。「E-value はいいばりゅー？」などというダジャレの課題名と裏腹に、何回読んでも、難解極まりない内容であった。みんなで勉強会をする、というきっかけがなければ、きっと高瀬川に丸めて捨てたことだろう。山のような課題とグループワークに必死に取り組み、学生同士で議論する

ことで連帯感が醸成された。こうして夏が過ぎた。

## 秋

秋は早かった。授業のコマ数も減り、アルバイトに行く学生も増えた。自分の懐を見ると、あっという間に年金、税金、健康保険、学会費、夏休み、その他諸々で銀行の預金は激減していた。手持ちがなくて、ちょっと滞納していたことを忘れていたら、健康保険も剥奪された。勉強するにも研究するにもお金がかかるものだ。共働きの妻に毎日感謝した。

後期からプロマネは英語になり、学生にとっては2周目を迎えた。指導の教授陣のコメントも心なしか鋭くなってきた。いや、前向きに捉えるなら、本腰をいれてコメントしてもらえるように学生がレベルアップしたのだ。そう信じたい。

## 冬

自転車通学する私にとっては、辛い時期となった。京都の風は骨身に染みる。朝、鴨川の橋を渡るときに見える白く輝く比叡山と水面で呑気に泳ぐ鴨だけが、私の心を少し暖かくした。

課題研究発表会が近づいてきた。「君の研究は修士には値しない、2年間何をやっていたのだ」と厳しくも愛のある最後の指導の場と聞いている。私はMCR 受講生に過ぎないので、さして緊迫感もなく暮らしているが、MCR 専科生にとってはきっと天王山に違いない。

もうすぐ一年が終わる。同級生と顔を合わす機会が減ると思うと淋しいものである。研究を続ける者、臨床に帰る者、様々であるが、ここまで真面目に人の研究の話を聞いて、一緒に考えることは、今後もうないかもしれない。この一年間で、時に熱く研究について真摯に向き合い、議論しあった経験は、きっと何にも代え難い貴重な経験になったと思う。

冬が終われば春がくる。また鴨川の桜はきっと綺麗に映えるだろう。去年の春より、少しは臨床研究のことに詳しくなった。また新しい仲間と環境で、この経験を生かして、社会に役立つさらなる研究に取り組みたいと思う。